

# 現代教育の反省と倫理

松 扉 繁 磨

## (1) 教育理念への反省

学習指導要領（社会科篇）の社会科社会の具体的目標には次の如く述べられている。

「われわれの政治的経済的社会的生活は民主主義の発達に伴って向上して来たが、その理念に照して見た場合、今日なお改善すべき点が多い。したがってわれわれの幸福な生活を確保するためには社会人としての各人の自覚と協力とによって民主主義の諸原則をさらに生活の各分野に生かすことが必要であることを理解させ、その実現のために努力しようとする態度とそれに必要な能力とを養う」と。

これは具体的目標の一つであるが、これを見ても分るように現代教育は一口に民主主義教育といってもその理念に照して見た時、正に改善すべき多くの点の存することは明かである。終戦以来この方日本の教育界はアメリカ教育の新しいいわゆる新教育なるものの息吹きにふれて、そこから学んだ事柄はまことに多い。特に教育の中心理念としての自由、自発性、個性、人格、創造性等は新教育の生命としてわれわれに好意を以てすすめて警告してくれたものである。多年封建の悪いしきたりの中にうずもれていた日本の教育はアメリカのこのいわゆる新教育の突然の流入によって多年の夢をさまされて喜び、美しい理想に飾られた日本が約束されたかに見えた。けれども日本の教育は広い視野と展望とをもたず徒らに皮相の見方におち込んだ。新教育の理念としての上述の概念はただ単にそれだけを引き離して考えれば確かに立派なかつ正しいものであった。正しい教育手段であった。しかもそれは従来の日本の教育にとって一番大事なものであるが、また一番欠けていたものである。しかし終戦以来新教育の美名に酔うて深い考察を加えず不用意であったために現代の日本教育は様々の欠陥を現わしてその改善を促されている。新教育の理念としての上述の諸概念は新教育においては大事なものではあるがそれは教育の方法論であり、従って新教育の全部ではない。われわれは、視野の狭さのために認識を誤ったうらみがある。アメリカの新教育のもつこれらの諸概念はアメリカという国の様々の伝統や慣習、道徳や経済、法律や制度等とからみ合っているものである。それにも拘わらずわれわれはそれらの美しい概念だけを抽象的に引き離してわが国の教育に移殖しようとした。これがわれわれの展望の狭さを現わすものである。アメリカが日本に新教育を教えた時、これら個人主義的原理の他に国家社会の要求と必要とを重んずる原理も同時に強調されていた。かくて個人主義的原理と社会的原理との二原理の調和を図ることの必要を痛感していたのである。このようなアメリカ自身の伝統を無視して古い個人主義的原理だけを新教育の原理のすべてであると考えたのが戦後の日本の教育であった。この時代おくれの原理を最新のものと思ひ違えて新教育の名のもとにもてはやしたのが日本の新教育であった。アメリカにおいては単なる個人主義的原理だけではアメリカ国家の発展が危険なることを知り、社会的原理を

も強調して二つの原理の調和を図ろうとしたのである。かくて個人主義的原理の一方面的尊重は絶対的無条件なものではないと考えた。個人主義的原理は社会的原理を害わないことは勿論、進んでそれを守り発展させることの出来る限度と範囲とにおいて価値を有すると考えられた。アメリカの新教育の父ジョン・デューイもすでに古い個人主義と新しい個人主義との関係に注目して古い個人主義が社会から分離し孤立した個人を考えてその自由や人格、自発性や創造性を強調することに強く反対してこれに警告を与え、社会の中に社会と共にしかも社会のために生きる新しい個人主義の立場を説いた。思うに青少年の成長発展において社会関係や社会環境はただ青少年に奉仕し青少年に刺戟を与えるものにすぎないと見るような個人主義的な社会観、個人中心的な自由はすでに過去のものとなっている。国家や社会は個人の発展のための単なる手段にすぎないという個人主義的な教育観は教育史が十九世紀の末葉以来すでに葬り去ったものである。この古臭い考えを現代の日本の教育界にもち込んだのがその正体は実に新教育の美名における時代おくれの個人主義的自由主義であった。日本とアメリカとでは事柄は逆である。従来日本の教育では余りに国家とか社会とかいう全体を重んじ過ぎたため個人の人格も個性も自由も創造性も抑えつけられていたのでアメリカの忠告と助言は有益であった。この忠告と助言とを新教育の美名のもとに新教育の全部であると思い込んだところに歴史的展望を忘れた教育の悲劇があり、終戦以来の教育の混乱の原因が横たわっていると思う。いかなる国家でも社会でもその健全な発展のためには個人と社会との両者を同時に重んずる全体観が必要であり、社会から孤立した個人は考えられないはずである。教育が歴史の中において生れ、かつ育ち、そして死んで行く具体的人間の形成を目標とする限り、社会から孤立した抽象的人間はすて去らねばならない。戦後の日本の教育はややもすると抽象的個人主義の原理を守り続けようとするかに見える。この個人主義はすでにデューイが社会の進展と変化とに合わないものとして時代おくれの古い個人主義と名付けたものである。個人の自由や人格、個性や創造性等を社会全体と対立させたり、社会全体から引き離して尊重したりすればその自由が放らつ無軌道となりその人格は他の人格や社会の全体を無視する非人格に化けその個性は社会的基礎を有たない利己的打算的特異性に墮落するのは当然のことである。新教育に深い考察を加えなかったのは青少年の人格や個性を圧迫し自由や創造性をさまたげるものでもあるかのように恐れたからである。しかもこの恐れを新教育の原理に適うことであるかのように誇り喜んだのである。そしてしらずしらずのうちに古い個人主義の立場に陥ったのである。かくて人間の社会的歴史的存在たる意義を忘れ、徒らに古いものの否定に走った。かくて伝統無視は索漠たる感じと不安定を生じ、現代教育の内面的充実に努力せねばならない所以をここに見出すのである。

## (2) 価値観への反省

永い間の戦争で正規の生活は破られ経済は異状を呈し、人口は多すぎ領土は狭すぎ、資源の少いわが国戦後の社会生活においては人々は通常の正しい生活の仕方や手段では生存することはむづかしい。このような社会の現実はどうのようであろうか。

日本全土にみなぎる華美虚栄浪費の甚しきは大きい。パチンコは華麗を誇って蛍光灯の明滅のうちに人心をぼけさせている。料飲店、ダンスホール又然り。宅地耕地不足のわが国に競輪場、競馬場、ゴルフ場等が増している。そして勤勉であるべき戦後日本人の心に価

値の錯倒を呼びむやみに射倖心をかり立てている。その害悪は大きい。毒々しい映画やストリップの看板も人心をばけさせている。ドブ鼠の巣窟を思わせる小路には怪しげな飲み屋、社交喫茶、バー、カフェー等々と称するものが続き、おそろしい騒音とごみとの渦巻く中に愚連隊や太陽族がのさばる。ベニヤ板とペンキとネオンサインの下のごまかし、いらだたしいカラ騒ぎ、歯の浮くような宣伝、何でもあるようだが実は何一つとりつく真実のない索漠たる感じ、心情の硬くなった人心、そして猫の目のように変る世相、これが日本の現実であり縮図でもある。外面的にはますます豊かに、内面的にはますます貧困になりつつある不調和不均衡、かくて価値の錯倒の現実の迷いが敏感な青少年に及ぼす害毒の大は思うて明かである。事の善悪、手段の正邪を問わず虚栄をみだし自己を満足させようとする衝動が様々の不徳、犯罪となって現われることは何の不思議もない。このような日本の現実を思う時、西ドイツの復興への努力に多く学ぶべきものがあると思う。

さて次にもう一つのことを考えてみよう。

わが国の今日の青少年はこのような生活現実にとり巻かれて酔わされている。更には文明の利器の異常な発達によって青少年は浅くてただ広い生かじりの断片的よせ集めの物識りになり勝ちな生活現実より逃れることは出来ないのである。

戦後の新しい学習指導法の中心的基础が経験学習または生活学習におかれてきた。学習指導法が経験や生活を重視してそれらを中心として営まれるようになったことは確かに新教育のもたらしたものである。しかし今日このような経験学習や生活学習に鋭い反省と批判とが向けられているのは事実である。それは様々の欠点を現わした。浅薄化の一語につきるものである。青少年はややもすると断片的な知識を浅く並べ立てて脈絡と統一のある知識に欠ける。「何ごとでも知っているようではあるが実は何も知らない」ということ、極言するといわゆる話の泉式、トンチ教室的知識、生れてはやがて消え行くその場限りの知識をもつが、人間生活の本質的統一的認識は余りにも断片的でありすぎると思われる。このような事態に声援を送るのが今ばかりの客観的テストなる評価法である。人間の知識がそのような評価法のみによって評価される限り認識の統一向上は望むに無理であると思う。経淡や生活を重んずる学習指導法は経験や生活そのものが元来有する非合理性と価値に対する冷談とのために非合理的、没価値的学習に陥る危険がある。この学習は生活や経験の単なるくり返し、単なる連続にすぎないものとなつてはいけぬ。学習は生活や経験に根を下しつつもそれを飛び越えてあるべきもの、あつてほしいものが指向されねばならない。即ち生活や経験が価値の光に照らされて向上する姿が学習の心である。そこに価値的統一のあるより高次の世界が拓かれるのである。かくて教育における生活、経験の立場は経験を越えて価値に、生活を去って論理にまで高められねばならない。価値の認識こそ現代教育に必要なであると思う。

### (3) 道徳観について

従来の個人道徳は一定の社会秩序の拘束力の上に成立している。従つてそれは絶対不変の原理ではなく、一定の社会の構成員としての個人間に成立して来た歴史的社会的産物である。一定の社会の中での閉鎖的なものであるから、外部の人間がその社会の社会秩序の安全をおびやかす、これに危険を与えると忽ちにして敵対行為が正当化される。このようにして起るのが戦争というものである。現代の倫理を考えてみると、いわゆる個人道徳の

制限が感ぜられる。今日の国際間の問題は誠に深刻ではあるが個人道徳はこれをどうすることもできない。更に国内において現代社会の汚職事件、疑獄事件が次から次へと起って国民の疑惑は深まり、その背任を問責しても一向に反省もせず、民主主義の美名にかくれて議会の頭数を頼んで権力乱用の多数決を敢てする。これに対しても国民相互の個人道徳は無力にされている。

現代の人間は平和をおびやかされ、人類の安全と幸福とは必ずしも約束されていない。一度戦争ともなれば大量殺傷の恐るべき兵器が公然と使われて人類の生命とその文化は滅亡するであろう。このような問題は国際問題であり政治問題であるが、他面また人類の道徳問題でもある。かくて平和の問題は現代世界における人類最大の道徳問題となっているのである。思うに道徳問題は現代においては単に個人の道徳的良心の問題ばかりでなく実に世界人類の運命に関する共同にしてかつ最大の問題となっているのである。この大きな問題にふれずに倫理道徳を単に個人の内面的良心の問題のみに局限しているのは時代おくれである。それは人類共同の安全と幸福の保証に関する問題であり、平和の問題であり、世界史的問題であるといわねばならない。かくて倫理道徳の問題は個人の正しい在り方から更に人類の正しい平和な在り方に関連して、世界史的問題となっている。平和こそ現代における教育的人間像の究極的目標であるといわねばならない。

かくて道徳は人間性の問題として世界的性格を帯びている。しかしこのことは従来の個人道徳の放棄を意味するものでなく個人間の伝統的良心の倫理は依然として否益々その価値と意味を持たねばならない。ただ問題は現代においては人間道徳の範囲が拡大されてきたのである。即ち人類の安全と幸福、人間性の解放という新しい道徳を中心として行われるようになった所に倫理道徳の現代的性格があると思う。かくて現代の倫理道徳は人間性を守るために凡ゆる努力を払わねばならない。

経済的立場からも政治的立場からもその他凡ゆる立場において人間性を守るために、いかなる問題とも取組まねばならない性格のものである。

#### (4) 人間的道徳的危機

現代は一つの大きな危機の中に立っている。大きな不安と動揺の中に立っている。それは人間が自らの存在を根こそぎ失いつつあることの危機である。人間に対する一番大きな危機は何と云っても人間が人間でなくなること、人間が人間性を失いはしないかということである。人間を人間にまで形成しようとする教育にとっては今日のこの危機はまたやがて教育そのものの危機でもあるといえよう。このような危機の正体は何か。またどうして起ったのか。人間から人間性を奪いつつあるものは何か。これにつき二つのものが考えられる。一つには人間以外のもの、人間のために役立つべきもの、人間にとって単に手段や材料でしかないものが人間を支配し逆に人間を単なる手段材料に格下げしようとしていることであり、二つには人間を人間に作り上げている要素のうちで人間を人間にするのに一番意味や価値の少ないものが一番意味や価値の多いものを抑えてその存在を主張しようとすることである。ここに現代の人間的危機があると思う。人間に値いする人間性即ちそれがなくては人間が人間になり得ないものとは一言でいえば理想であり価値である。あるべきものをあるべき姿において求めて止まないのが人間たる所以である。このように人間が求めて止まないものが理想であり価値である。

現代の社会、わけても現代の日本の社会は価値感覚が錯倒していることはすでに述べた。この誤った社会環境の影響は敏感な青少年の心にもそのまま喰い入っている。ここに日本教育の根本問題の一つがある。青少年の正しい価値感を目覚まし強めることにある。そこに日本教育の復活と新生の鍵があると思う。かくて青少年の道徳教育においてはもっと視野を広げて、道徳教育を単に狭い範囲の訓練や躰におくことなく、人間全体の教養に努めることによって道徳的品性の形成を営まなくてはならないと思う。人間の道徳力はいわゆる狭い道徳の中に孤立してあるのではなく、人間精神の全活動のうちに働くのである。現代においては戦争こそ道徳の危機の最大なるものであるといわれる。しかもその戦争においては、いうまでもなく一般に道徳的感受性が鈍り人心がすさび不安動揺が甚しく不正虚偽が公然として行われやる。人間生命の軽視、刹那的官能的な享楽主義ひいては人間相互の信頼感の消滅等々の危機を作り出す。然し戦争はまた逆に道義力が人間の内面から失われるところから起る。人間性の喪失が即ち一切の人間性を抹殺するような惨虐な現代戦争を可能にするともいえる。このようにして戦争と人間性の喪失とは相互関連していると考えられる。道徳の危機の最後のものとして人間そのものの根本的な在り方がいつも問題になるのは確かであろう。人間性の回復、再発見ということが道徳再建の第一歩であると思う。一般に倫理とか道徳とかいうものはいつの時代でも人間が人間として真実に誠実に生きることと考えられて来た。また人間とは個人的存在であると同時に社会的存在であると説かれている。そして人間におけるこの二つの属性が予定調和的に本質的に相関連するものと考えられているが、今日の如き複雑な社会においては社会と個人との間の距離が大きくなった時、自己を徹底的に生きることと社会に誠実であることが両立しがたい矛盾に陥る事の多いのが常である。しかし道徳の危機の救済のためには常に人間性の絶対的信頼性を確立し、人間性の純粋性のよう護が必要であると思う。

## (5) 政治と倫理

民主的政治はその政治の中に誠実さを宿さねばならない。現代の政治にあっては倫理こそその主体性を現わさねばならないにもかかわらず倫理はいつも政治の道具として扱われる傾向が強い。そして政治的利害のためには倫理的価値はいつも危険にさらされる。困難な問題にぶつかると政治家はよく「政治的解決」をするという。そして倫理の本質は解体され消失させられる所に政治への不信懷疑をかもし出すことになる。現代日本の政治家は多くの場合民主主義を口にしながら非人間的な権力争奪と責任回避のかたまりになっていることは彼等自身の人間喪失の甚しさを物語るのである。ここに政治の根本的貧困があるとも思われる。倫理が政治のために手段化されている所に、政治の無誠実があり横暴がある。政治が倫理を自己の口実として使っていることは人間にとって悲しむべきことである。倫理とは本来人間が自主的にものを考え、行動するという自由の確保を主眼としている。政治は元来権力関係のものであり専ら人間の外面的生活態度に関係するものであって結果の華々しさに関心をもつものである。倫理は人間の内面的生活に関するもので良心の自律性を中心として出発点の美しさに関心をもつものである。その限りにおいて両者の間には区別がなければならない。しかし倫理は弱々しくも政治の前に屈服してはならない。ここにおいて倫理は政治の上に君臨して政治以上の領域を開拓して行くことはできないだろうか。倫理の力を最大限に発揮して逆に政治を是正し引きずる力を倫理にもたすことは

できないだろうか。これがしばしば倫理の過信に陥る危険をもつものである。かくて倫理は政治の下に従属してもいけないし、政治の上に君臨することも現代の社会においてはできないとすれば結局政治そのものの中に倫理を生かして行く以外に道はないと思う。倫理は政治を通して価値を追求し政治は倫理を通して自覚する所に倫理と政治との生きる現代の道があると思う。ここに倫理のイデーと政治のイデーが相互声援し合って行く必要があると思う。

## (6) むすび

現代の教育においては幾多困難な問題が多いがすでに人間像の平和的理想像についてふれたから最後に更に次のことを加えてむすびとしたい。

現代教育における人間像は、現代人の無力感を克服して真に社会の形成者として、社会を創造する意志の人でなければならない。現実の所与の社会をただ上手に自己のために利用して社会をいわば上手に泳ぐだけでは教育の何の目標にもならないと思う。即ち人間形成の目標は誠実と意志の二大根本力に自己を支えつつあるべき社会の良き形成創造の主人公たらんとするところにあると思う。

## 世界史低学年履習についての所見

光 谷 音 吉

去る8月、文部省主催によって開かれた、指導者養成講習会の時に集められた資料にもとづいての調査が報告されているが——正井寛三氏——、それによれば、社会科各科目の選択状況の内、普通課程では、全日制・定時制をあわせて120校のうち、世界史の履習を欠くものは、僅かに1校であり、職業課程の106校中では、12校となっている。しかも全日制普通課程での世界史は、95校中85校が5単位を考えており、必修教科としての新社会を5単位で履修させようとしているのは、100校中61校しか示されていない。この数値によって、世界史が高等学校社会科の中で、その准必修的性格と内容とが、多数の学校や指導者から期待され、重要視される面を如何に多く持ちあわせているかを印象づけられるのである。

観点はいろいろであろうが、とにかく、それだけの期待と必要性とが認められている世界史を、一体どの学年で履習させるのが最も妥当であるかについては、各県、各校のそれぞれの特長事情もあって、さまざまな問題点があるに相異なるが、本校としても、昨年度までに、改訂の趣旨を考え、一般社会が社会として内容が整備された事や、中学の社会科、特に歴史的分野の内容と時間などの面を判断のより所として、一応、第1学年で必修という線を決め、諸般の準備を進めた。

前記の調査中、さらに別の面を眺めると、社会を1年または1～2年で履習させようと試みられているのは、90校中61校も示されており、世界史第1学年履修は、その大勢からは、いささか遊離したような結果になってはいるが、ともかく方針通り、本年4月から実施して来た。今、約半歳を経て、いろいろ考えさせられる点もあり、その効果などについて